

国語

1

出典

市村弘正『敗北の二十世紀』〈Ⅱ 非正規性の空間〉(ちくま学芸文庫)

解答

- | | |
|----|---------|
| 問一 | (1) オ |
| 問二 | (2) ア |
| | (3) イ |
| | (4) ウ |
| | (5) ア |
| | (6) ウ |

- 問三 ウ
問四 ア
問五 エ
問六 オ
問七 イ
問八 ア
問九 ア・ウ
問十 (X) | ウ
(Y) | イ
(Z) | ア
問十一 ウ

問十二 オ

問十三 ウ

問十四 ア

解説

問二 (4) 「ありう」は「ありえる」に同じ、「ざる」は打消の意味で、直後に「ありえない」と言い換えがある。ア・イ・オは「ある」という意味になるので、不適。「本来は」の意を表す語は含まれていないので、エも不適。

問三 「世俗化された世界」が「このように強烈な危機意識を刺戟する」とある。これは同段落冒頭で述べられている『中立化と脱政治化』の過程に対する危機的認識と対応している。「中立化」についてはそのあとで、「神学という中心領域の放棄すなわち中立化」と説明されている。つまり、「世俗化された世界」とは「神学という中心領域」が「放棄」された世界のこと。それに最も近いウが正解。

問四 傍線部(b)はそのあとで「この『機会原因主義』的な修正過程」と言い換えられている。「機会原因」とは、偶因の意で、偶然何かをそうさせるようになった事柄のこと。また、第七段落に「シユミットはこの（レオ・シユトラウスの）注解に応答したのだろう。しかしそれ以上に、おそらく時代状況に『応答』しようとして、……書きかえた」とある。その内容を踏まえているのは、アである。

問五 そのあとに「そこに消極的に……中立化の世界から、政治的なものを守らなくてはならない」とある。すなわち、「政治的なもの」を脅かすものとなる「そこに消極的に……中立化の世界」は、「政治も国家も存在しないような世界」と同義だと解釈できる。第二段落冒頭にあるように「中立化と脱政治化」にシユミットは「危機的認識」を抱いていた。そのような世界になってはならないという意味になるエの「怖れ」が最適。

問六 「安全性の世界はいわば『真剣さなき世界』と同一化される」とある。簡単にいえば、「真剣さなき世界」には安全が存在するということである。その点でイ・ウ・エは不適。第六段落に「政治に敵対する者たちが望んでいることは、

……真剣さなき世界を打ち立てること」とあることから、〈政治的なものの消失によって生み出されるのが真剣さなき世界〉ということが読み取れる。さらに、同じ第六段落の最後の文の内容から「政治的なもの」＝「道徳的なもの」であることが読み取れる。つまり、「真剣さなき世界」には「道徳的な規準」が欠落していると考えてよい。第五・七段落にある「道徳」にはその前の「政治的に無色の」がかかっており、政治と国家が存在している世界（「真剣さなき世界」と対極にある世界）における道徳とはまったく別のものと考ええる。よって、オが最適。アは本文に言及がない。

問七 直前の段落に「味方と区別された敵をもつこと……の意義は、……危機的な状況においてこそ明白なものとなる」とある。その意義は、安全な状況ではなく危機的な状況すなわち「危険性のなか」でこそ考え得るものということ。

問八 第七段落のシュミットの言葉のうち、前半部分に傍線部(d)の言う「奇妙な接続語法」が用いられており、「くなら……であろうに」と反実仮想の形で語っている。「味方と敵の区別」が消失することは、シュミットにとって「真剣さなき世界」の到来であり、それはすなわち「安全性の世界」の到来でもある。そして、「世界の全体化」を現出させる世界戦争は「危機的事態」にほかならない（第十段落）。これらの内容を捉えたアが最適。

問九 アは、本文冒頭に「政治的なもの——それはシュミットを動かしつつ上げる固定観念のごときもの」とあることと合致。イの「レオ・シュトラウスの『注解』」については第六段落で取り上げられているが、「その力線を強調して読んでいた」とある。「その」は前段落の第二版の記述を指しているので、「『注解』」に回答するために「出されたのは第二版ではなく第三版ということになる。ウは、第十二段落のシュミットという言葉に「激烈な非人間的な戦争……このよきな戦争は——政治的なものを越え出してしまつて」とあることと合致。エは、第三段落に「第三版（一九三三年）においてなされた改訂や変更については、すでにレーヴィットによって指摘」とあることと合致しない。オは、本文冒頭の「政治的なもの……固定観念のごときもの」とあることと合致しない。カは、一九六三年に復刊したのは第二版であること（第三段落）と合致しない。

問十一 その前に「全体国家に対して有効なのは、同じく全体的な革命のみである」とある。「街頭ホウ起やバリケード」はその「全体的な革命」と比べるとまったく有効性をもたない、何の価値もないものだ、という文脈を押さえる。「見戯」は文字どおり、子どもの戯れの意。「見戯に等しい」は慣用句として用いられる。アの「弊履」は、やぶれたくつゝの意。惜しみなく捨てて顧みない、という意味の慣用句「弊履を棄つるがごとし」で用いられる。

問十二 第十段落に「世界の全体化を人々の眼前に現出させたのは、……世界戦争という危機的事態」とあり、第八段落では「味方と区別された敵をもつこと……の意義は、……危機的な状況においてこそ明白なものとなる」と述べられていた。しかし、第十二段落にあるように「世界Ⅱ戦争」は「敵そのものを消失させてしまうような戦争」なのである。敵そのものが消失してしまつては、危機的状況で意義が明白になる、という論理は成り立たなくなる。すなわち、シュミットの思考は「難問に直面」してしまふのである。このことを捉えたオが最適。

問十三 「国境の中へと追い返されるべき敵」と対立するのが、「決定的に絶滅されなければならないところの」敵である。これは、どこにいようとどんな人間であろうと敵は敵、いわば絶対的な敵である。その逆が「国境の中へと追い返されるべき敵」と考えればよい。自分の国の中にいるから、または侵略してくるから敵と見なされるにすぎない、ということ。

問十四 「技術性の宗教」はそのあと、「人間のもつ無際限の力や支配への信仰と、それがもたらした世界戦争の『絶滅』性」と言い換えられている。よつて、神そのものについて言及するウ・エ・オは不適。イは「敵を絶滅させるため」に「技術を推進する」が本文にない。世界戦争では敵そのものが消失してしまい、シュミットにおける「政治的なもの」、「道徳的なもの」の存立が危うくなつてゐる。その内容を踏まえた、アが最適。

山田仁史『人類精神史 宗教・資本主義・Google』〈第8章 ユーラシア大陸と〈軸の時代〉〉（筑摩選書）

解答

- 問一 (1)ーイ (2)ーウ (3)ーウ
問二 オ

問三 イ

問四 ア

問五 ウ・オ

解説

問二 第六段落の「こうした精神性」は、第四段落冒頭の「父系の系譜をひじょうに大切にすること、第五段落冒頭の「農耕民への軽蔑的態度」を指す。そして、それらの「精神性」は「時代とともに変わってきてはいよう。しかし……今もそうした基本形が残っている」と続く。傍線部(a)「変わらぬ何かが見えてくる」はそれを繰り返したもので、オが最適。ア・イ・ウは「変わることなく保たれている」ものの捉え方が誤り。エは「現在の信頼できる現地調査者の話」の内容が誤り。シンジルトも藤本も「裕福な牧民はそれを雇い人に任せてしまうという事実」を目にしたとは言っていない。

問三 「その違い」とは、同段落冒頭にある「牧夫性は、農母性とはおおきく異なる」を受けて言ったものであり、さらにこれは前段落の「牧畜民と農耕民のメンタリテイの違い」を言い換えたものと考えてよい。よって、〈牧夫性（牧畜民のメンタリテイ）は〇〇で、農母性（農耕民のメンタリテイ）は××である〉という方向で説明がなされているものを選ぶ。ア・ウ・オは、「その」の指示内容が誤り。エは、後半の内容「豊饒を生む大地を……社会を作った」が本文には書かれていない内容。

問四 傍線部(c)の前後に「ステップ遊牧民が……草原帝国の国力が充実したとき」、「ため込んだそれを時おり爆発させる

騎馬遊牧民の社会」とあることから考える。イ・ウは、「軍事行動を起こす」ときについての記述が誤り。エは、「農耕民は……交渉で消費するように仕向けた」の部分が誤り。オは、「怒りのエネルギーをぶつけていた」の部分が誤り。

問五 アの「皮革製品や……装飾品など」については第二段落にあるが、「交易をおこなうため」とは述べられていない。イの「プルジェヴァリスキーの報告」については第三段落にあるが、「牧畜民が農耕を嫌悪の対象とする」とは述べられていない。ウは、第三段落に「それにかかる手間」が「限られている」「馬や駱駝の世話は男の仕事」であり、「牛と羊は女の仕事」と述べられていることと合致する。エの「モンゴルで上天神が信仰されているという事実」については第八段落にあるが、「一九四九年の講演会」で報告したのは「ヨーロッパからの旅行者」ではない。この事実については講演会で取り上げたのは、研究者の「石田英一郎」。オは、最終段落に「石田と梅棹の……構図を、……歴史的な観点からとらえたのは江上波夫」とあり、その江上の「描きだした見取図」の説明に「ユーラシア大陸の……四大勢力圏」とあることと合致する。カの「農耕地と放牧地の関係」については第九段落に述べられている。前半の内容は適切だが、後半の内容は本文に「接触をもつ時には、つねに遊牧民が優越的立場」「遊牧民が定住中国社会へ出撃してきた」とあることと合致しない。

3

出典

『和泉式部日記』

解答

問一

(a)ーウ

(c)ーイ

問二

エ

問三

ウ

問四

(e)ーア

(g)ーイ

- 問五 ア
- 問六 オ
- 問七 (1) 1ーウ 2ーウ 3ーイ (2) 1ーオ 2ーカ 3ーエ
- 問八 (V)ーア (W)ーウ
- 問九 (X)ーウ (Y)ーア
- 問十 イ

解説

問一 (a) 形容動詞「ねんごろなり」の連用形。〳熱心なさま・丁寧なさま〳を表す。

(c) 形容詞「便なし」の連体形。〳都合が悪い〳〳感心しない〳〳気の毒だ〳など複数の意味をもつ。「便なきこと」は、具体的には〳自分(女)の男関係についてのよくないうわさ〳を指す。つまり〳自分にとって都合が悪いこと〳の意。

問二 直前に「宿世にまかせて」とある。「宿世」とは〳前世からの因縁・宿命〳の意。「あらむ」の「む」は、自分自身のことを言っている文脈なので、意志で解釈する。すなわち、「宿世にまかせてあらむ」は〳前世からの因縁にまかせていよう〳、つまり〳成り行きにまかせよう〳という意味。直前に「(宮の屋敷へ)参りなむと思ひ立つ」とある。その考えのままにしようということである。アは「まめやかなることども……耳にも立たず」の部分と合致しない。イは本文になく、ウ・オは「宿世にまかせてあらむ」と決意したあとの内容である。

問三 傍線部(d)は形容動詞「をこなり」の連体形で、〳愚かだ・馬鹿げている〳の意。何に対してそのように思っていたかについては、直前に「さりともと頼みけるが」とある。これは宮から女へ宛てた手紙であり、〳あなたのことを「さりとも」とあてにしていた自分が馬鹿だった〳と宮が言っているのだと解釈できる。「さりとも」は〳そうはいってもやはり〳の意で、ここでは〳女の男関係についてのよくないうわさが聞こえてくるが、そうはいつでもやはり自分のことを愛してくれているはずだ〳ということを行っている。アは「をこなる」内容の捉え方が不適。自分の屋敷

に女が来るはずがないと宮自身が思っているのに、女が宮の屋敷に移り住むことを考えているというのは不自然。

問四

(e) 「あさましう」は形容詞「あさまし」の連用形がウ音便化したもので、意外なことに驚くさまを表す。宮からの手紙には、短く、あなたを信じた私が馬鹿だったとあり、古今和歌集の歌を引いて女を見放すような言葉が書いてあった。それを読んで女は「胸うちつぶれて、あさましう」感じたという文脈を押さえる。

(g) 宮からの手紙を読んで返事もできないでいたところ、「なか御返りもはべらぬ。……」という手紙がまた宮から届く。そこにも古今和歌集の歌が引かれていたが、それは、人のうわさがひどくても二人の間に愛情があればそれでよいという内容のものだった。「うちつぶれ」た胸が「少し開」いたという流れを押さえる。

問五

副詞「よも」は下に打消推量の助動詞「じ」を伴って、まさかくだらうという意味を表す。ここは「よも」の下に「あらじ」が省略されている。

問六

女が贈った和歌「今の間に……」の中に「君来まさなむ」とあることに着目する。こここの「まさ」は尊敬の補助動詞。「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形。「む」は助動詞でここでは勧誘の意。つまり、女が「君(宮)」にこちらに来てくれるように言っているということである。それに対して宮は、女がそのように言ってくる理由を「名のたつことを思ひけり」と言っている。その前の女の歌の中にもある「名」は、うわさ・評判の意で、「名が立つ」で、うわさになるの意。

問七

(1) ガ行上二段活用の動詞「過ぐ」の連用形。「ず」をつけると「過ぎず」となる。

(2) ラ行変格活用の動詞「あり」の連体形「ある」が「あん」と撥音便化し、その撥音便が無表記になったもの。直後の「べか」も撥音便無表記で、「あべかめりつる」は「あり+べし+めり+つ」が「あるべかるめりつる」↓「あんべかんめりつる」となったもの。

問八

(v) 「聞こしめさ(聞こしめす)」は尊敬語で、お聞きになるの意。「れ(る)」は受身、「じ」は打消意志の意。(宮が) お聞きになることを(自分が) されないようにしよう。つまり、宮に聞かせたくないということ。そのよ

うに思ったから、女は「好き事せし人々の文」にも居留守を使って返事をしなかったのである。「いかで」はここでは「何とかがして」の意。「いかで」を「どうして」、「れ」を尊敬でとれば、オのように訳せないこともないが、〈宮が「便なきこと（＝自分の男関係についてのよくないうわさ）」を聞くはずだ〉と女が確信しているという解釈には無理がある。

(W) 「まめやかに（まめやかなり）」は「真剣に・まじめに」の意。「のたまはせ」は、サ行下二段活用「のたまはず」の連用形で「言ふ」の尊敬。〈已然形＋ば〉の形なので、〴〵ので〴〵と訳す。これらすべてを押さえたウが正解。

問九 (X) 助動詞「つ」の連体形「つる」に接続していることから、断定の助動詞「なり」と判断する。「なり」の連体形「なる」が「なん」と撥音便化し、その撥音便が無表記になったものである。

(Y) 未然形に接続していることから打消の助動詞「ず」の連体形とわかる。疑問を表す副詞「などか」の結び。

問十 「さへ」は副助詞で、添加の意味を表す。直前の和歌に「名のたつ」とあることに着目する。「名」が「たつ」だけでなく「腹」までも「立つ」というのである。

4

出典

元好問『続夷堅志』〈包女得嫁〉

解答

問一 (X)ーエ (Y)ーア (Z)ーウ
問二 エ

問三 イ

問四 ウ

問五 ア

問六 ウ

問七 ア

解説

問二 傍線部(a)の前に、「南征兵」が強奪してきた「婦」を「倡家」が高値で買い取ろうとしたとある。それに対して「不行」なのだから、「拒絶した」という解釈が適切。「行動しなかった」としたア・ウは不適。「倡家」は「婦」を殺そうとしていたわけではないので、イの「死にたくない」は不適。拒絶したら殺されるかもしれないが、それでも「倡家」に売られるのは嫌だとして拒絶したのである。

問三 直前に「捶楚備至、婦遂病」とあるが、これは「ひどくむち打たれ、婦は病気になった」の意。このことを「隣里」は「嗟惜」したのである。死んではないので、アは不適。ウ・エは「嗟惜」の対象が誤り。

問四 「我能……良人」は「女巫」の言葉で、憐れな境遇にある「婦」を救い出し、「良人」と結婚させようと言っている。「令」は使役を表し、「くしむ」と読む。エは、「婦」を「良人」であるようにさせるという意味になるので、不適。アは「良人」を使役の対象として読んでいるが、このように読むためには「令良人適」という語順になっていなければならない。また、「良人」を行かせるという意味になる点も不適。ここでの「適く」は「嫁ぐ・嫁にゆく」の意。

問五 ここは「女巫」が「婦」を救うために、神(速報司)が自分に乗り移ったという演技をして「倡家」の主人を脅している場面。ウ・エは「私」を良家に嫁がせるとしている点が不適。傍線部(d)の後半部分の主語は「吾」なので、「滅」は「滅ぼす」と読むべきだが、イは主語を「吾」と捉えておらず、「滅ぼされる」と訳している点が不適。

問六 ア・イは「包希文」が話の中に登場しているように解釈しているが、実際に登場はしていない。自分に神が乗り移ったふりをした「女巫」が、その神を「包希文(速報司)」と語っただけ。エは「婦」を「包希文の孫女」としているが、彼女をさらった「南征兵」がそのように称しただけであり、また、彼女は「亡くなっ」てはいない。

問七 間に一字おいて「神」から「触」に返っているので、ここには「一・二点」を用いる。「触」から一字上の「所」に返っているので「レ点」がつくが、そこから間に一字おいて「問」に返っているので「所」には「一レ点」がつく。